

2020年
大賞作品

流浪の月

風良 ゆう 著

東京創元社



読み進めると止まらなかつた。展開に引きつけられ、文章

も読みやすく、一気に読み終えた。だが、テーマは重い。

登場人物の心情の表現がとても巧みで、だから、苦しくなる。主人公たちの抱えるもどかしさや絶望感、世の中の不条理。そのひとつひとつは、現実に行き起こっていることと重なる。彼や彼女等の生き辛さは、親のエゴ、情報が溢れるweb上のデジタルタトゥー。真実を伝えようとしても、周りが勝手に解釈して、違う方向へと向かってしまう。様々な事を考えさせられる。最後には、彼らが軽やかに、たぶん「愛」を感じながら、生きていけるようになったのかもしれない。そうであって欲しい。それが、読み手には救いとなる。

2021年
大賞作品

52ヘルツのクジラたち

町田 そのこ 著

中央公論新社



「52ヘルツのクジラ」とは、他のクジラが聞き取れない高い

周波数で鳴く、世界で一頭だけのクジラ。その声は、周囲の仲間にも、何も届かない……。これは、人間の世界にも存在する。家庭という密室で。虐待される子ども達、なのだ。

「町田そのこ」の文章は、情景の表現が上手い。雨の景色、風光明媚な海辺、暗い海、遠くに見えたような気がする、クジラの尾ひれ……。登場人物の、救いようのない暗い影との対比。真実が明かされるたび、涙がこみ上げる。「祈る」気持ちで読み進める。怒りがこみ上げる。やはり「祈る」気持ちで読む。

読後感を伝えたいところだが、結末がわかってしまいたいそうなので、控えることにする。

2022年
大賞作品

同志少女よ、敵を撃て

逢坂 冬馬 著

早川書房



戦争を描いた小説である。1941年から始まった独ソ戦。フィクション

と言いつつ、参考文献の数を見ると、かなり史実を調べ上げて執筆したのだろうと想像する。

娘の暮らす小さな村に、ドイツ軍が突然現れて、村人を皆殺し。娘は復讐のため狙撃兵となる。「女性を守るために」と。

「面白かった」とは、言えない。戦場は、あまりにも残酷。権力者には、自分で銃を持って戦えと、言い

たくなる。

本屋大賞を受賞した2022年は、ロシアがウクライナ侵略を始めた年。物語の中で、主人公が「ロシアとウクライナの友情は永遠に続いていくだろうか」と語るシーンがある。歴史は今に続いているのだ。未来を良い世界に繋げるには、今を、どう解決すれば良いのだろうか。

みて特集
Presents

本屋大賞 6作品

じっくり 読んでみました

息苦しいほどの夏の暑さはどこへやら。

すっかり涼しくなった夜風が心地良い。を飛び越えて、

肌寒さすら感じる今日この頃。

もうすぐやってくる冬の始まりも見え隠れしてきましたね。

そんな年末の間の秋の夜長に、ゆったりのんびり読書はいかが？

でも、何から読めばいいのかな……と、本選びに困ったら、

全国の本屋さんを選んだこちらをどうぞ！

2023年
大賞作品

汝、星のごとく

風良 ゆう 著

講談社



プロログを読んだ時点で、この物語の内容を想像し

たものの、

それは全く異なる内容だった。若き高校生の男女が、成長しながら人生を紡いでゆく……。ただそれは、一筋縄ではいかない。これでもかと打ちのめされ、さまざまなことを背負いながら、それを受け止めていく。普通の恋愛小説なんかではない。

心情の表現が繊細。息苦しさを覚える程の、中盤からの展開。頁を繰る手を止めさせない。生きにくい世間の中で、脆く弱い人間たちを次々と浮かびあげていく……。プロログは、スーッと見事にエピローグへとつながる。

読了。寂しさと、不思議と清々しささえ感じた。読んでいる時は、あんなに苦しかったのに！
続編「星を編む」も読みたいと思う。

2024年
大賞作品

成瀬は天下を取りにいく

宮島 未奈 著

新潮社



表紙を見ると、「ああ、若い人向けの作品なのだろう」と想像でき

る。主人公は女子高校生、成瀬あり。少々変わり者、と言うか、我が道を行くタイプ。

文章は実に読みやすく、内容も単純明快でサラッと読み終える。読み手の年代によって、感想は変わるだろう。中高生の頃に、この本に出会っていたら、もう少し心を動か

されていたかもしれない。つまらないわけではないのだ。この先、成瀬ありはどんな事にチャレンジするのだろうと興味湧き、この子が我が娘だとしたら、頼もしく思えるか、心配してしまうか……親目線で読んでしまった。

ただ、本音を言うと、「本屋大賞を受賞した作品」なら、もう少し読み応えが欲しかった。

2025年
大賞作品

カフネ

阿部 暁子 著

講談社



なんとも言えない複雑な切なさ、遣り切れなさ。でも温かな何か、心に

流れ込んできた。全体的に女性目線の物語。

登場人物は皆個性的で、様々な事情がある。中盤で思いがけない展開もあり、ざわざわしながら読み進めるので、少々疲れも感じた。でもそれは、退屈せずに読めるという事だろう。

生と死、愛ってなに？親兄弟との距離感だつて難しい、理解し合える事なんてゼロに近いというのに、他人と心を通じ合える事なんてある？いやいや、身内だからこそ余計なジレンマがあるのだろう。「人間」って、皆、周りの人には分からない荷物を背負って生きている。そんなことを思い出させる。そして、「食べる」ことは、「生きる」こと、生きる力が漲るはず。